2. 仙台平野名も高く　たがやす土は黒々と
みのり豊けきわが宮城　とはにいみじきこの山河
たたへてともに育くまん

3. はかり知られぬ海の幸　つきぬ宝の山の幸
めぐみあまねきわが宮城　ここに働く喜びに
興る産業新文化

4. 新日本の建設に　忍苦の道をきりひらく
意気新たなるわが宮城　めざす理想のふるさとを
われらこぞりて打ち建てん』〕

49. 花旗とは何か

問　『風帆一道向花旗』の花旗とは何ですか。

答　これは、仙台の玉虫左太夫が、安政7年〔1860、3月3日桜田門外の変が起ったことにより3月18日万延と改元〕1月、米国視察に出発するにあたり、大槻磐渓らへ残した別離の詩「遑々人生ト安危。許国此身無二思。万里鯨涴坦如砥。風帆一道向花旗。』の結句です。この漢詩では、花旗はアメリカ合衆国のことを指しています。玉虫左太夫は、この旅行の見聞記「航米日録」の中で『花旗国総説……花旗国ハ<海国図志云、因船挿星旗広東人謂之花旗>北亜米利加洲ニアリテ一名米利堅国ト云、又「ウエナイトステート」ト云フ、合衆国ト云義ナリ』と説明しています。もと、花旗とは、中国広東人の目に、米国の星条旗が、花をデザインしたものに映じたので、その旗を花旗と呼んだことに始ります。文献始出は「海国図志」（魏源）で、『因船挿星旗広東人謂之花旗』とあります。この書は、わが国に伝わって非常に多く読まれているので、花旗の語は、幕末・明治初年の志士や文化人の間で、よく詩文に用いられました。

注(1)　諱は誼茂〔やすしげ。「仙台人名大辞書」「仙台叢書」別巻第6の内の「航米日録」解題等に茂誼とあるのは誤。〕、字は子発、通称勇八、後に左太夫と改めた。拙斎また東海と号した。文政6年〔1823〕仙台北五番丁に生れ、幼少の時から文武両道にすぐれていた。玉虫家は代々新陰疋田流の槍術で「槍の玉虫家」といわれていた。24才の時、江戸に出て大学頭林復斎に学びその学力を認められた。安政の初め、伊達家の家臣で江戸で修学する者の監督を命ぜられた。富田鉄之助・横尾東作・木村信卿等の英才も玉虫の指導を受けた。安政7年〔1860〕1月18日、幕府使節新見豊前守が条約調印のため渡米した時、その一

行に加わった。時に38才。9か月にわたってアメリカの文物制度を詳しく視察して、9月28日帰朝した。彼はその見聞を「航米日録」8巻の大冊に収めて、伊達慶邦に献じた。慶邦はその非凡な眼識を賞揚し、即日部屋住身分の彼に禄を給し大番組に登用した。程なく養賢堂指南頭取に任ぜられて、世界の大勢を説き、人心の向うべき方向を明示した。戊辰の動乱に際しては、但木土佐の厚い信任を受けて、錯雑をきわめた事態の処理に力を尽した。敗戦後「仙台騒擾」〔せんだいそうじょう〕といわれ、新政府が6百名の鎮撫兵を送り込むまでの内部抗争が起った時、彼はその犠牲となって、投獄され切腹を命ぜられた。明治2年4月14日、47才の時であった。保春院に葬る。この時、左太夫と共に死罪に処せられた者には、若生文十郎・安田竹之輔など有為な人材が多かった。「武道」（小原伸、「宮城県史」第18巻の内）に『政府は外務卿の最適任者は玉虫左太夫なりとして使者を仙台に派したが、時既に遅かった。政府要路は出先県官〔置県前であるのでこの用語は不可〕に命じてこの後軽卒に人命を奪うべからずと訓令した。』とある。

なお、左太夫の通称勇八とあることから父平蔵の八男のようであるが、この続柄には諸説があった。「玉虫拙斎先生」（清水東四郎、「拙斎玉虫先生五十年祭誌」（山本晃編）の内）に『玉虫左太夫は誼茂〔ヤスシゲ）……玉虫平蔵伸義の第五子なり実は八男なれども、女子三人あれば五男とあるは之によれるか、又二男とせるは誤りて勇蔵緑園の弟とあるにより斯くせしものか。文政六年仙台に生る……　其の誕生月日を詳かにせず、明治二年四月四十七歳にて自刃せるより逆算して文政六年としたるなり』また、「玉虫左太夫とその周辺」（玉虫文一、「日本思想大系」月報8の内）に『玉虫左太夫は（別名〔本名とすべきである〕誼茂）は文政六年〔1823〕父信茂の七男として仙台に生まれ……』とある。

注(2)　往路は米国船ボーハタン号、帰路は米国軍艦ナイヤガラ号によった。

注(3)　きょこく。国に許す、身を捨てて国に尽すこと。

注(4)　アメリカ事情の非凡な観察、精細な記録で、この洋行に参加した者の見聞記中で抜群と評される。「仙台叢書」別巻第6、「西洋見聞集」（「日本思想大系」第66巻）に収録されている。

注(5)　清の魏源の著。アヘン戦争後の道光27年〔1847、わが国の弘化4年〕刊行60巻、咸豊2年〔1852〕100巻24冊本として増補版を出した。「地理備考」と「合省図志」とを合集補訂したもので、古今東西の史書・地誌を渉猟して世界の大勢を説いてあるので、わが国にも輸入され、志士や文化人が争ってこれを読んだ。幕末の開国論も、大いにこの書の刺戟によるといわれる。この書の刊本としては咸豊2年〔わが国の嘉永5年に当る〕古微堂重刊定本が現存する。魏源は湖南邵陽の人。字は黙心。道光帝に仕え、高郵州の知州となった。きわめて博学で文才あり、「詩古微」「書古微」を著して詩・書両経の奥義を説き、また歴史地理に精通して「海国図志」のほか、「聖武記」「皇朝経世文編」等の著がある。

（1794～1856）

資料　大漢和辞典（諸橋轍次）

航米日録（「仙台叢書」別巻第6の内）

〃　（「日本思想大系」第66巻の内）

50.　「男児立志出郷関」の全詩とその作品

問　「男児志を立てて……」の全詩と、その作者を教えてください。

答　この漢詩は「題壁」と題する七言絶句です。

男児立志出郷関　学若不成死不還

埋骨豈期墳墓地　人間到処有青山

この詩は、多くの人々に愛唱され、僧月性〔げっしょう〕の作であると誤まり伝えられてきたが、実は勤王の志士村松文三の作です。「折々のうた」(1)（大岡　信）に、

『骨を埋むる豈に墳墓の地を期せんや(2)　人間〔じんかん〕到る処青山有り　村松香雲

幕末の志士。十五歳で故郷伊勢を出る時壁に残したという七言絶句の転結。起承部は有名な「男児志を立てて郷関を出づ　学もし成らずんば死すとも還らじ」。「人間」は世間の意。「青山」は木の茂る山をいうが、ここでは墓。骨を埋める場所をなんで家代々の墓（「墳墓の地」）とだけ決めることがあろう。世間どこにも、いざとなれば死場所はある、到る所が家郷なのだ。従来僧の釈月性の作とされてきたが、研究によって誤伝であることが明らかにされた。』とある。また、「明治人物逸話辞典」下巻（森　銑三編）にも、『僧月性の「題壁」の詩「男児立志出郷貫。学若不成死不還。埋骨何期墳墓地。人間到処有青山。〔マヽ〕」の一首が人口に膾炙〔かいしゃ〕しているが、これは実は村松文三の作るところだった。文三は月性とは深交があったのであるが、決して月性の作ではない。安政五年〔1858〕に『近世名家詩鈔　を編纂する時に、青狂〔村松文三の号〕の署名を、月性の号清狂の誤書だろうとして、月性の作としてしまったので、そのことは同書の編者巌谷一六や薄井竜之の言明するところである。』と誤伝の原因が明記されています。更に、大槻文彦の「復軒旅日記」(3)〔殁後の昭和13年8月富山房発行〕の中の「伊豆蓮臺寺温泉滞在記」(4)〔大正6年文彦71才の時〕に下田の村松春水〔文三の子〕訪問記があり、このことについて次のように記しています。『男児立志出郷関の詩は人口に膾炙するも此〔これ〕文三の作なり（文三仙台に来り一医家に入聟となり家娘との間に一男を設けしが一年許〔ばかり〕にして離縁して去れりと云）。京都の僧月照(5)〔月性の誤り〕と交際深かりし故に此詩誤って月照の作と伝えられたりとぞ。』とあります。但し、月性を別人の月照と誤まり記している点は注意を要します。「月性」と